

えば、ルーヴル美術館は、フランス革命によって王室の財宝を市民所有に転換して、ルーヴル宮殿を改装して1793年に開館しました。

このように美術館とは、「美術作品を展示しているところ」という以上に、「美術作品を収集して、保存しているところ」でもあるのです。美術館にとっては、コレクションを維持、発展させることは、美術館の存続にとって必要不可欠の活動なのです。

名古屋市美術館の収集方針とは…。

このような美術館の存在と活動は、美術館が開設された「場所」に規定されます。名古屋市美術館の場合は、名古屋という都市(地域)において、世界と向かい合いながら活動することになります。名古屋における近代以降の美術の歴史を展望できる美術作品を収集・保存して、展示・公開することで、現在および将来における新しい美術の創造に寄与することが、名古屋市美術館の「存在理由」であり、「存在証明」となるのです。

このような意味で、美術館の収集方針において「郷土の美術」は基盤となるのです。郷土(名古屋を中心とした伊勢湾周辺の地域)に何らかの所縁(生誕、居住、活動、縁者など)のある美術家を対象として、歴史的な動向を展望できるようなコレクションを形成することが原点となるのです。

このような「郷土の美術」の美術家たちのなかから重要作家として選定されたのが、パリに生きパリを描いた荻須高德、メキシコに渡って活動した北川民次、戦後の現代美術において逸早く国際的に活躍した荒川修作、河原温、桑山忠明でした。さらに、国際都市・名古屋に相応しく、収集方針を国際的に拡張するとき、「郷土の美術」の重要作家たちの芸術をより深く理解できるようにするために、荻須との関連により「エコール・ド・パリ」、北川との関係で「メキシコ・ルネサンス」、荒

川、河原、桑山と同時代の「現代の美術」という新たな収集方針が決定されたのです。

「愛美社」と「サンサシオン」

「郷土の美術」の歴史において特筆される活躍をしたこれらの重要作家に対して、「郷土の美術」の歴史を地道に築きながら忘れられてしまった作家たちを発掘して、代表作品を収集することもまた重要です。

名古屋市美術館では、開館準備から現在まで、20年以上に渡って、「郷土の美術」に関する系統的な調査・研究を行って、貴重な作品を収集・保存してきました。名古屋の近代洋画の歴史的な展開のなかで、とくに重要な役割を果たした二つのグループ「愛美社」と「サンサシオン」については、それぞれのグループに関係する主要な作家の作品を収集して、その全貌を明らかにしてきました。

「愛美社」は、岸田劉生の草土社名古屋展に触発された大澤鉦一郎を中心にして、「美を愛する」青年たち(萬代比佐志、森馨之助、鶴城繁、藤井外喜雄、山田睦三郎、宮脇晴、水野正一)によって、1917(大正6)年に結成されました。劉生の細密描写による神秘主義的な写実主義に対抗して、自画像や身近な子どもたちの肖像画、静物画や風景画を制作しました。絵画を制作することによって、自己に問い掛け、世界の深奥を見つめ、存在の不思議を感じた作品群は、現在においても見応えがあります。

「サンサシオン」は、1923(大正12)年の関東大震災で帰郷した松下春雄を迎えて、鬼頭鍋三郎、中野安治郎などによって結成されました。詩人・春山行夫が命名した「サンサシオン」とは、フランス語で「感覚」を意味する言葉であり、まさにモダニズムが急激に進展する都市生活を踏まえた新しい「感覚」による絵画の探究に彼らは取り組んだのです。第3回展以降には、遠山清、大澤海蔵、富澤有為男、山内静江、市ノ木慶治などの若い画家たちが順



第1回愛美社展(1919年)

次参加するとともに、帝展や光風会展で活躍する画家たちを輩出して、名古屋を代表する美術団体になりましたが、1933(昭和8)年の第10回展の開催後に解散しました。

二つの記念写真を見比べてみてください。ひとつは愛美社第1回展(1919年)、もうひとつはサンサシオン第1回展(1923年)の同人(と関係者)の集合写真です。

愛美社は全員が羽織袴の着物姿で二人が学生帽を被っています。このとき26歳だった大澤(後列右端)を除くと、20歳前後の青年ばかりでした。最も若い17歳の宮脇(前列右から2人目)と18歳の山田(前列右端)は、まだ名古屋市立工芸学校図案科に通っていたのです。

サンサシオンは4名が背広姿でネクタイを締めています。このとき松下(後列左端)は20歳、鬼頭(前列右から2人目)は24歳、中野(後列右端)は22歳でしたが、三人とも名古屋の銀行や会社で働いた経験がありました。

時間的には、わずか4年の違いしかありませんが、彼らの姿を見ていると、この頃、いかに時代が動いていたのか、いかに美術が変わろうとしていたのかが実感できます。

「郷土の美術」を発掘する意味とは…。

ここに名前を列挙した画家(15名)はすでに物故していましたが、作家同士の連絡関係を手繰りながら遺族を訪ね歩くことを続けるなかで、大量の作品が遺されている作家もあれ



第1回サンサシオン展(1923年)

ば、戦災によって作品を焼失した作家もあれば、絵画制作の期間が短くて作品のない作家もあれば、屋根裏から新たに作品が見つかる作家もありました。このようにして地道な調査・研究によって、忘れられた画家を発掘して、それぞれの条件のなかで確かな作品選定を行って、コレクションを充実させていく活動は、美術館(学芸員)としても醍醐味を感じるものです。

美術館が「美術作品を収集して、保存しているところ」であることには、もう一つの重要な意味があります。収集とは、すなわち美術作品の「救出」でもあるのです。歴史のなかに埋もれ、価値を忘れられた美術作品は、いつか必ず消滅してしまいます。地震や火事などの大災害でなくても、薄汚れた美術作品は粗大ゴミでしかないのです。破られ、壊され、焼かれ、捨てられてしまうのです。誰もが見向きもしない美術作品を発掘して、価値付けることで初めて収集されて、コレクションとなって保存されるのです。

大きく澄んだ瞳の可愛い娘や切れ長の眼が印象的なモダンな姉に私たちが会うことができるのも、このような「郷土の美術」の発掘によるものなのです。

日本各地を訪れて、その街にある美術館に行ったときには、常設展を覗いてみてください。そこには発掘された「郷土の美術」の貴重な作品が展示されていることでしょう。(sy)

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示④ 額とガラス

展覧会をご覧になったお客様からの質問でよくあるのが、「ガラスのはめられた作品とそうでない作品があるのはなぜか?」。この質問の発展形の「ガラスがはめられているのは高い作品で、無いのは安い作品?」というお尋ねもよくあります。ガラスがある方が何となく大切にされている作品では、というイメージから生まれた質問だと思いますが、答えは「ノー」です。展覧会に出品されている作品にガラスがあるかないかは、あくまでもその作品の所有者の方の考え方によります。つまり、作品をお借りして展示している美術館の判断で、ガラスをはめたり外したりすることはない、ということです。作品はお借りしたときの状態で、そのまま展示し、そのままお返しするというのが展示の原則です。確かに同じ壁に展示された何点もの作品の中で、ガラスがはめられていたり、なかったりすると、「これは何か意図があるのでは?」と想像したくなるのですが、実は何もありません。たまたまガラスのある作品と無い作品が交じり合っていたに過ぎないのです。

それでは所有者の方はなぜガラスをはめたり、はめなかったりするのでしょうか? 厳密な調査をしたわけではないので、以下は推測ですが、恐らく大半の場合は作品を入手した時点ではまっていればそのまま、無くてそ

のまま、つまり前からそうだったからそのままにしてあるということでしょう。もちろん中には、大事な作品なので、保護のために新たにガラスをはめました、という方もいるでしょうが、多分少数です。個人所蔵家の方で、そこまで意識を持っていらっしゃる方は多くはありません。それでは美術館は? 実は当館のコレクションの場合も、当初はあまりガラスのある無しに意識を払わず、収蔵した時点のままで展示をしていましたが、ある時期からガラスを外して展示するようになりました。絵の具の質感や筆遣いなどを、よりリアルに鑑賞していただきたいと考えたからです。またガラスがあると反射が気になって見づらいという点も理由の一つです。

ガラスがあれば確かに作品の保護になります。特別展の終了後、作品の点検をしていると、ガラスの表面に明らかに新しいシミのようなものを発見することがあります。クシャミや咳の跡と思いきこれらのシミを見る度に、これでガラスが無かったらと、ゾッとすることもしばしばです。恐らくそういう経験を踏まえてのことと思いますが、海外から借用した作品の中には、貸し出しの前になってガラスを新たにはめられたものがあります。普段とは別の環境で長期間展示するわけですから、念のためという気持ちは分からないでもありません。しかし、です。作品保護という観点なら、それは自分の館でも同じこと。貸し出す時だけガラスをはめるというのは、何か信頼されていないような気分でもあり、割り切れない思いを抱くのは私だけでしょうか。(F)

展が開かれる理由のひとつは、そのなじみやすさが美術に親しむ糸口になるためでしょう。

「はじめての美術 絵本原画の世界2013」展は、開館25周年を迎えた名古屋市美術館がはじめて開催する絵本の原画展です。この展覧会は、宮城県美術館が所蔵する絵本原画コレクションによるもので、宮城県美術館を立ち上げりに、名古屋市美術館、平塚市美術館、静岡市美術館を巡回します。

宮城県美術館は、他に先駆けて平成10(1998)年から絵本原画を収集しはじめ、現在では約500タイトル、概数10,000枚を所蔵しています。1956年創刊の福音館書店の月刊絵本「こ

感想ノートから

青木野枝 | ふりそそぐものたち

名古屋市美術館
2012年10月20日(土)~12月16日(日)
[豊田市美術館
2012年10月13日(土)~12月24日(月・祝)]

豊田市美術館との連携企画として名古屋市美術館と二館でひとつの展覧会として開催された「青木野枝 | ふりそそぐものたち」展。感想ノートには、両館をご覧になっての方と当館を先行してご覧になった方の両者の記述が残されています。当館を先にご覧になった方が「豊田が楽しみです。」と記してくださっているのは、当館の展示がご期待を裏切らなかったのだと思えて、担当者としてうれしく感じています。

当館の2012年11月14日(水)付けのブログで、名古屋おもてなし武将隊の前田慶次さんと陣笠隊の踊舞(とうま)さんが本展のテレビ取材にいらっしゃったことをご紹介しました。このブログの末尾に感想ノートに書き込みをするおふたりの写真がアップされています。折角なので、ここにおふたりの感想を紹介させていただきます。

「『鉄』が透明というお主の人間性そして感性に本日はほれた。直接会い、作品について話ができれば良いな。感動した。」(前田慶次)

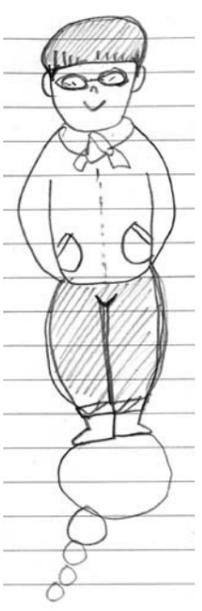
「壁を全て取りはらった空間を使つての展示は異空間におるようでございました。また鉄という無機質な物を使つておるのにあれ

ほどまでに表情や色あいが出せるのには感動いたしました。」(踊舞)

「惚れた」なんて、慶次さんのファンに青木さんが妬まれそうです。皆様の感想の多くにも鉄を使った彫刻とは思えない軽やかさについての驚きや感動が記されています。私たちがなかに入ってしまうほど大きな作品をどうやって展示室に運び入れ設置したのか、不思議に思われた方も多かったようです。感想ノートに限ったことではありませんが、お客様からいただいたご質問で最も多かったものがこれでした。

当館でのワークショップにご参加いただいた方の感想を最後にご紹介します。ワークショップのときの青木さんを描いたイラスト付きです(図版参照)。良く似ていて、あんなに集中して作業していたのに、いつの間に観察していたのだらうと感心してしまいました。

「すごく好きです。ワークショップも楽しかったです。どうして鉄という重くて堅い素ざいなのにやわらかくて、せんさいなんだろうとずっと思っていました。実際に鉄をあつかってみると、鉄という素材自体がやわらかくてせんさいなものなんだなあと思いました。豊田市美のたまごのやつがすぎでした。」(み。)



展覧会 現在進行形

はじめての美術 絵本原画の世界2013

2013年6月15日(土)~7月21日(日)

美術館で絵本の原画を紹介する展覧会が行われるのは、今ではめずらしいことではなくなりました。この地域でも刈谷市美術館や高浜市やきもの里かわら美術館、清須市はるひ美術館がそれぞれ幾度か開催しています。絵本は誰もが一度は手にするものです。原画

どものとも)の初期作品を中心とするこれらには、「おおきなかぶ」(佐藤忠良)、「しょうぼうじどうしゃじぶた」(山本忠敬)、「ぐりとぐら」(山脇百合子)、「おしゃべりなたまごやき」(長新太)、「はじめてのおつかい」(林明子)など、世代を超えて今なお読みつがれている日本の絵本を代表する名作が含まれています。

宮城県美術館のコレクションによる「はじめての美術 絵本原画の世界」展は、2002年にすでに一度開催されており、当時のコレクション約3,000枚から50タイトル約320点が選ばれて、宮城県美術館を含む国内四つの美術館を巡回しました。今回は、外すことのでき

ない先述の名作絵本に加えて、その後収蔵されたものを中心に、選りすぐった26作家43タイトル320点あまりの作品をご紹介します。

絵本は、人がはじめて出会う美術画集とも言えます。絵本と出会ったときの喜びを思い出していただくとともに、印刷では再現できない原画独自の表現に触れていただくことで、本物の美術作品が持つ力とそれがもたらす喜びをあらためて感じ取る機会としていただきたいと思っています。魅力あふれる絵本原画の世界を是非お楽しみください。(み。)

郷土の作家たち

金子 潤(かねこ じゅん/1942—)

1942年7月13日、名古屋市熱田区に生まれる。両親はともに歯科医。太平洋戦争末期の空襲を逃れて3歳のときに長野に疎開し、8歳までをそこで過ごす。1950年、家族とともに名古屋に戻る。中学を卒業後、キリスト教系の高校に進学したが、学校になじめず2年後に定時制高校に移る。一方で母の薦めもあって絵を描くようになり、地元の画家、小川智に絵の手ほどきを受ける。定時制高校を卒業後、絵の道に進むことを決心するが、日本の学校制度に対する疑問があり、小川の推薦もあって1963年8月にアメリカ、ロサンゼルスに向かう。ロサンゼルス空港で金子を迎えたのは、小川の友人で日本での滞在経験もある陶芸家のジェリー・ロスマンであったが、彼が金子を連れて行ったのは現代アメリカ陶芸のコレクター、フレッド・マラー夫妻の家だった。後に金子が陶芸を師事することになるピーター・ヴォーコスをはじめ、ケニー・プライス、ビリー・ベングストンなど、当時のアメリカを代表する陶芸作家の作品が所狭しと飾られたマラー夫妻の家で数ヶ月間を過ごすうちに、金子は陶芸に強

い関心を抱くようになる。その後、ロサンゼルス美術学校で絵画と陶芸をともに学びながら、次第に関心は陶芸に移っていく。1971年、クレアモント大学の大学院を修了すると一時日本に帰国。翌年アメリカに戻るとニューハンプシャー大学の陶芸学科長となり、さらに翌年にはロードアイランド・スクール・オブ・デザインで教鞭を取り、2年間をそこで過ごす。1975年には再度日本に帰国し、設楽町名倉に住居兼工房を建設し、大作に取り組むようになる。1979年にアメリカに戻ると、ミシガン州のクラムブルック美術アカデミーの陶芸学科長となり、以後86年まで務める。一方で1982年からネブラスカ州オマハで陶芸のワークショップをはじめ、翌83年には代表作の一つとなる「ダンゴ」のシリーズが始まる。「ダンゴ」はもちろん「団子」。味も形も素朴この上ないこの日本の食べ物の名前をアルファベットでDangoと作品に付けることによって、渡米20年になる金子は、自らの創作のルーツに、陶芸の初心に回帰しようとしたのだろう。その結果生まれた作品は、圧倒的なスケールと存在感を示し、一方で見るものを優しく手招きするような包容力と、心ませるユーモアとを兼ね備えた、まさに金子の自画像のような作品となった。以後現代アメリカを代表する陶芸家の一人として、多彩な活躍を続けている。(F)

どこがおもしろい?!

今回取り上げる作品は草間彌生(1929—)の《ピンクボート》(1992年)です。鮮やかな光沢のあるピンク色の作品は、展示室のどこにいても自然と見る者の目を引き寄せます。2012年6月2日から7月16日までの間にご来館いただいた方々のコメントを紹介します。

「ヘモグロビンで感じ。赤血球みたいですね。なぜボートにしたんだろう?なぜピンクなんだろう?乗ってみたいけど絶対くつろげない(笑)。どこに連れて行かれるんだろう?いろんな想像をはりめぐらしてしまふ、面白い作品!!!」(かねださん、20歳)

「離れたところから見ると、海底にいそうな、ちょっと気持ちの悪い生き物みたい。あるいは微生物を大きくしたようにも見えて、ちょっと不気味。草間さんがこのような作品を作るとは意外でした。」(Reikoさん、57歳)

「これでもか、これでもか、と恐怖の突起物をつくりつづける強さ、と同時に、なぜか全体をみるとかわいさを感じる。そのギャップに魅力を感じる。」(フォレストさん、28歳)

「赤ちゃんになる前の素(もと)でボートを形作っているの?だからピンクなんだ。皆で作ったボートは幸せな所へ行くんだろうね。——と妄想しながら観てました。」(Yasuさん、68歳)

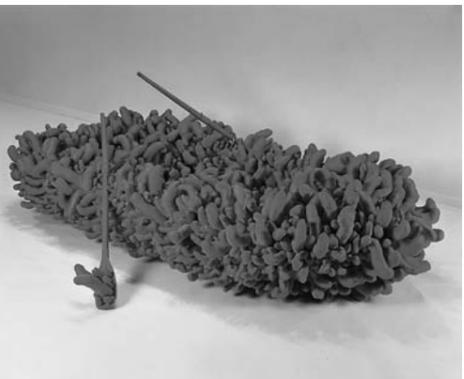
「乗るのが少しこわいような、でもちょっと乗ってみたいような。知らない場所に確実に連れて行ってくれそうで、頼もしい。」(青わにさん、27歳)

「オールがかきだしているコトからわかるように、ピンクの素材でできたボートが浮かんでいる場所もピンクの素材で満たされているという矛盾が不思議で、おもしろいと思いました。」(秀さん、24歳)

「床が緑色に見えるのがいい。」(T.Kさん、45歳)

「The fact that Yayoi loves pink very much is well-known, but I'm afraid pink color for the boat is not welcome. (編者訳:草間彌生さんがピンク色大好きということによく知られているけど、このボートにピンク色はどうかと思う。)」(Hishyさん、52歳)

「私はボツボツしたものとか、ニョロニョロしたものとかがいっぱいあつまっているのは



草間彌生《ピンクボート》1992年

気持ち悪くてきらいです。この気持ち悪いのをとことん突きつめていったら、快感に変わるのでしょか?私は草間さんの原色のドットの作品が、なんでみんなにうけているのかが、よく分かりません。みんなには不快ではないんでしょうか。不快だからいいのか?それとも快いものがあるんでしょうか?この「ピンクのボート」は私を守ってくれる安全なものとは思えません。」(匿名、年齢未記入)

「ほくは何かが集まった物体がきらいだけど、草間さんの作品は何だかよく分からないけれどいいと思って見ていました。とくにへんな物体を集めて作品を考えて、それをなしとげる所にかんげきしました。ほくはこれを水にうかべるとしずむと思うんですが、ためした事がないようなので、一どやってみて下さい。」(大西さん、8歳)

「草間さんの作品は、ただのモノではなく、そこに何かうごめいているように思えます。それは細胞が増殖しているような、小さな物体が密集して一つの作品を形成しているからかな?同じような形態のものが集まってモノが存在しているのはあたりまえでみんなは知っているけれど、みんなの目(私も含めて)には滑らかな線にしか映らない。だけど草間さんは、それらがそれぞれで存在して、個々のものを持ち、いびつであったり、細かいことが見えているのかな?視点が変われば見えるものも違う。」(オザキさん、22歳)

草間は1962年にアメリカでのグループ展で、ソファを突起物で覆い、白く塗った立体作品2点を初めて発表しました。以来、テーブルや椅子、衣類などの表面に、詰め物をした布製の突起物、マカロニ、花などを密集させた作品を継続的に制作します。色は白、本作品のピンク、赤、ゴールド、メタリック・シルバーのほか、彼女のシンボルとして知られる水玉模様などのバリエーションがあり、色のちがいや柄の有無が印象を大きく左右します。今回もご意見をお寄せいただいた皆さま、ご協力ありがとうございました。(3)

杉山 健司(すぎやま けんじ/1962—)

名古屋市に生まれた杉山健司は、1989年に愛知県立芸術大学大学院を修了し、その後名古屋を中心に活動を展開してきた。作品は一見ポップな雰囲気を持ち、楽しげな印象を与えるものだが、そこには杉山の独自のコンセプトも表れている。

杉山は当初、「Inside Outside」シリーズという大型の作品を制作したが、この時点で既に、「見る」あるいは「見られる」ことへの関心が強かったと考えられる。そこでは壁やマジックミラーを通して見ることによって、鑑賞者が見る、見られる自分を意識するという仕掛けがあった。その後、海外でのアーティスト・イン・レジデンスへの参加や作品の発表という体験を経て、作品は「Institute of Intimate Museums」へと展開していった。パスタやチーズなどの箱の中に小さなミュージアムを作り出したこのシリーズは、作品を「見る」場所であるミュージアムをさらに我々が覗き込むという仕掛けによって、やはり「見る」あるいは「見られる」ことを意識させるものとなった。またそこには、ミュージアムという存在についての思索を促すという要素もあり、視覚的な側面とコンセプト的な側面が無理

なく融合していた。その後の作品においては、ミュージアムを訪れる鑑賞者に焦点を当てる試みがなされるようになった。ミュージアムとそこで鑑賞する人々を共に作品化することによって、「見る」「見られる」視線は何重にも交錯することとなった。絵画とそれを見る人々、そしてその人々を見る我々・・・という風に。近年は、やはり「見る、見られる」ということを意識しながら、その表現がさらに多様に展開し、大きな広がりを見せている。

杉山の作品は、視覚面とコンセプト面の両方で、私たちに訴えかけるものを持っている。そして、何よりも、鑑賞者を楽しませる作品でもある。遊び心とユーモア、軽やかさは、彼ならではのものである。今後のさらなる展開が期待される。(akko)



杉山健司《Institute of Intimate Museums 眼球》2011年

イベントレビュー

芸術と科学の杜 アート大会

昨年の11月3日の文化の日に美術館のある白川公園で「芸術と科学の杜 アート大会」というイベントを開催しました。普段あまり美術館を利用されない方にとっては、美術館というとなんだか堅苦しい、入りにくいといったイメージが少なからずあると思います。そんなイメージを払拭するべく、誰でも気軽に楽しめるアート体験を通じて、美術をより身近に感じてもらいたいとの思いで今年度初めて開催したイベントです。

当日の催しは全部で4つ。1つ目の催しは、美術館と科学館の建物を長いロープでつなぎ、そこに参加者が思い思いの絵を描いたカードをつるして飾る「美術館と科学館をつなごう」です。「芸術と科学の杜」というコンセプトをそのまま具体化したようなプログラムでした。こどもたちはササッと描いてしまおうだろうと予想していたのですが、意外に1枚1枚じっくり時間をかけて描き、力作がロープに飾られてとても嬉しそうでした。

2つ目の催しは「彫刻スタンプラリー」です。皆さん意外に気づいておられないのですが、白川公園には美術館の敷地も含めて数多くの彫刻作品が点在しています。この彫刻を地図を片手に探検します。彫刻の前で当館のボランティアさんと作品について話ながら同じポーズをしてみたり、後ろや斜めから見てみたり。「何だこれー」という声があったところから聞こえてきました。

3つ目の催し「不思議なフィルターで宝探

し」が一番人気でした。「宝探し」というネーミングにつられてか、こちらの予想をはるかに超えるお客様が長蛇の列をなし、大変お待たせしてしまいました。偏光フィルターという光の屈折を利用したフィルムを窓に透かすと、あらかじめ窓にセロテープで描かれていた文字が浮き出てくるというもので、3つのキーワードを集めて連想する芸術家をあてるクイズに答えてもらいました。

そして4つ目の催し、当館の代表作品であるモディリアーニの「おさげ髪の少女」の巨大絵を描く「巨大地上絵in白川公園」は目玉企画でもあり、一番不安な企画でもありました。グラウンドにどうやって絵を描くのか、いろいろ検討しましたが、今回は運動会の看板などに使うお花紙をグラウンドに打ち付けて色をつけることにしました。実験ではうまくいったのですが、本番では場所によって杭がうまく入らなかったり、風にあおられて紙が舞いあがってしまったりハプニング続きで大変。それでも参加者の方が一緒に紙を拾って打ちなおしてくださり、なんとか完成しました。

どの催しも皆さんが笑顔でとても楽しそうに参加されているのを拝見して、今回のように普段美術にはあまり興味がないという方も含めて、気軽に美術に親しんでいただける場を提供していく

ことで、名古屋の美術を取り巻く環境も少しずつ変わっていくのかもしれないと感じました。(ナ)



イベントガイド

■名古屋美術館開館25周年記念 上村松園展

美人画の歴史に残る数々の傑作を世に送り出し、女性初の文化勲章を受章した上村松園。その清らかで格調高い美の世界を紹介します。会期：4月20日(土)～6月2日(日) 料金：一般1,300円・高大生900円・小中生500円

【講演会】 ※2F講堂・無料・先着180名 日時：4月28日(日)午後2時～ 内容：「上村松園一生涯の姿勢を絵筆に托して」 講師：吉田俊英氏(豊田市美術館長) 日時：5月19日(日)午後2時～ 内容：「上村松園一きもの愛する心とその芸術」 講師：長崎巖氏(共立女子大学教授)

【展覧会解説】 ※2F講堂・無料・先着180名 日時：5月4日(土・祝)・5月25日(土)午後2時～ 解説者：保崎裕徳(名古屋美術館学芸員)

■特別展「はじめての美術 絵本原画の世界2013」

1956年創刊の福音館書店発行の月刊絵本「こどものとも」の初期作品を核とする宮城県美

術館の絵本原画コレクションから26作家43タイトル320点あまりの作品を紹介します。

会期：6月15日(土)～7月21日(日)

■常設企画展 ポジション2013

水野誠司・初美展

この地方で活躍する作家を紹介する企画として、水野誠司・初美夫妻の写真作品を紹介します。

会期：6月15日(土)～7月21日(日)

■コレクション解析学

※2F講堂・無料・先着180名

日時：4月14日(日)午後2時～

演題：「サイン：浮遊する言葉と意味」

講師：竹葉丈(名古屋美術館学芸員)

作品：エドワード・ルッシュェ《20世紀》1988年

日時：6月16日(日)午後2時～

演題：「ディエゴ・リベラ作《メキシコ文部省

壁画》記録写真から見えてくること」

講師：笠木日南子(名古屋美術館学芸員)

作品：ティナ・モドッティ《[メキシコ文部

省壁画：統一戦線]》1928年頃

休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、6月4日(火)～6月14日(金)、7月23日(火)～8月9日(金)です。詳しくはHP <http://www.art-museum.city.nagoya.jp> をご覧ください。(ナ)

展評

2013年2月7日(木)～2月24日(日)
ハートフィールドギャラリー

トザキケイコ展

—今ここにあるものは やがて消えゆくもの

トザキケイコの作品は、どれも繊細である。海で拾った貝殻や、小石や、小さな四葉のクローバー、それに小枝や草など、いろいろな素材が集められ、小さな箱庭のように設えられている。そして、昔から古い家にあったような、お線香を入れる箱とか、大なべの蓋とか、そういった懐かしい感じのするものも、素材となっている。七輪で焼いたという陶器もずっと展示されている。そして、それらの合間には、小さな埴輪も置かれている。埴輪は作家がここ2年程の間に作り始めたものだというのだが、箱庭のようなオブジェと不思議によく合っており、ギャラリーに少し古代の風を吹かせるような、そんな役どころかなと思う。昨年の展覧会では、埴輪が初めて展示されたそうだが、その時にはギャラリーの照明を落とし、窓も閉め、厳かな雰囲気を作り出したという。そのような場面では、埴輪はより呪術的なものを感じさせたことだろう。今回は一転して明るい外光を取り込み、開

放感のある展示になっていたの
で、埴輪の呪術的な雰囲気はそれ程強くは感じられない。

それぞれのオブジェたちは、古くからの時間の記憶を宿しているように見える。可愛らしいけれども、どこか神秘的なのだ。作家は、「私は制作する時、自分のルーツは、すべての物事に神が宿ると信じられた、この国の文化にあるのだと感じます。」と記している。彼女の作品は、現代の作品であり、また、西欧の香りもするものだが、そこには日本という国の古くからの文化が息づいているのだと思う。日本の古いものを大切にしながら、そこに現代性や西欧的なものも取り入れていくということは、これからの私たちの課題ではないかと思う。彼女の創り出す小さな世界が、私たちの未来をも考えさせてくれるということに、感銘を受ける。

最初は苔を素材にし、毎日水をやって育てていたという作家。そんな優しさも、作品に表れて、じわじわと私たちに魅了するのである。(akko)



トザキケイコ 《空の温度と 光の粒子》 2013年

展評

2013年2月2日(土)～2月24日(日)
一宮市三岸節子記念美術館

View—まなざしの軌跡、生まれくる風景 津上みゆき展

津上さんは「View」と名づけた風景画を一貫して描き続けている画家、と紹介されています。ただし作品の中にモチーフの輪郭やはっきりとした形は現われないので、ずいぶん特殊な風景画だと言えるでしょう。この画家は、ものの形に囚われていては見えないものを表現しようとしたのでしょうか?あるいは記憶の中で鮮やかに(またはかすかに)よみがえってくる、その場の空気や風情のようなものを、色彩やブラシの軌跡に託したのでしょうか?絵の特徴からすると、そこには確かなものより移りゆくものへの共感があるような気がします。モネならば、移りゆくものとは主に日の光や天気の変化なのでしょうが、津上さんの場合はさらに描き手の揺れ動く心情が影響しているように思えます。

津上さんは、目に留まった風景をモレスキンの手帳などに描きとめていて、これが制作の出発点になっているそうです。今回の個展で私が惹かれたのは、秋晴れの空を背景に立つ一本の樹のスケッチから派生した、大小二枚の本画(画像参照)でした。現実を写した具象的な一枚のスケッチから、どうしてこうも飛躍し

た抽象的イメージが生まれるのか、また、どうして色のトーンや密度がこうも違う二つの景色が生まれるのか、驚きとともに作品を眺めていました。しかもどちらも破綻無く美しいのが魅力的です。津上さんの作品は、見た目の美しさ(色彩の選択と重なり)の妙)はもちろん、現実の風景に端を発しているせいか、構図の安心感と飽きない奥深さがあり、深読みや感情移入に耐えられる強さを持っているように思います。画家自身も、「風景」が鑑賞者によって自由に解釈されることを望んでいるようです。

世界の見え方は一つではないし、色彩にしろ何にしろ、外界にはいろんな可能性が潜んでいる、そんなことを感じさせてくれるのが津上さんの絵画です。500号の新作絵画では、輪郭とは呼べないまでも何かの存在を感じさせる「線」がいくつも登場するという、新たな傾向が見えました。世界はますます多くのことを津上さんに語りかけているようです。(nori)



左: View-at 2:50 p.m., 15 Oct., 09-11
右: View-at 2:50 p.m., 15 Oct., 09-10

展評

2013年1月12日(土)～5月6日(月・休)
名古屋ポストン美術館

『ドラマチック大陸 —風景画でたどるアメリカ』

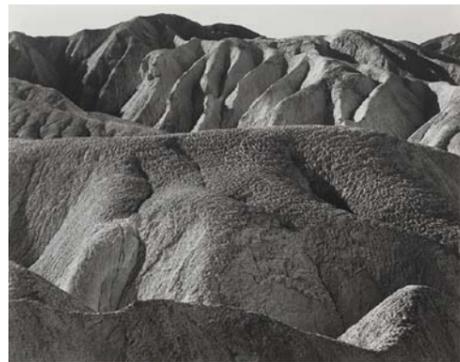
風景とは、それを見る人の思想や宗教、更には文化や時代背景によって形成されるものでもある。アメリカの絵画、なかでも風景画の成立と展開には、他の国や地域とは異なり、「新大陸」に移住し、未知の大陸の風景を受容し、やがて「母なる自然」として表現して行く独自の経緯がある。45名の画家と写真家の作品62点によってその展開を辿る展覧会が開催されている。展示は、アメリカへの移住が始まった東海岸のニューイングランドから、中部大西洋、南部を経て、途中、「想像上の風景」と題した一章を挟んで、西部へと展開する。

日本向けのアレンジなのであろうか、出品作品には日本人画家・吉田博(1876-1950)による木版画2点《ナイアガラ瀑布》と《グランド・キャニオン》が含まれていた。明治30年代に自然主義文学の影響を受けて成立した近代日本の風景観を引き継ぐ吉田の版画は、紛れもなく「観光」の視線によるものであり、図らずもこの2点が日本とアメリカの画家との風景に対する意識の違いを明確に表明していた。

そのことを強く印象づけたものは、第四章に挙げられた絵画と写真の作品群である。「西部」に向けられた視線は、正しく「開拓精神」によって拡張して行く「合州国」の生成過程を追体験させるとともに、モダニズムの「西漸」をも象徴するものでもある。都市型のモダニズムが表現の行き詰まりを見せた1910年代、

ニューヨークの画家や写真家たちは新たな表現を求めて都市を離れ、西へ、そして荒野を目指した。アメリカの純粋抽象絵画の先駆者でもあるアーサー・ダヴ(1880-1946)や、その影響を受けたジョージア・オキーフ(1887-1986)の絵画、さらにはエドワード・ウェストン(1886-1958)の写真は、未開の荒野に対峙しながら、彼らが自然のフォルムを強調し、その風景に抽象形態を見出し、表現しようとしたことが確認できる。自然、あるいは風景を「崇高なもの(the sublime)」にまで高めようとした意識と表現は、戦後の抽象表現主義へと引き継がれ、やがて「絵画」独自の奥行きと拡がりを獲得することになる。

展覧会名に冠された「ドラマチック」という言葉には多少の違和感を禁じえないものの、アメリカ絵画、さらには写真を含めた風景の成り立ちの軌跡を見せる展覧会は、「アメリカにある素晴らしい自然美と有名景勝地を紹介する」という趣旨ほど、決して「退屈」なものではなかった。(J.T.)



エドワード・ウェストン 《ゴールデン・キャニオン、デスペラー》 1938年
The Lane Collection / Museum of Fine Arts, Boston.
Photograph©2013 Museum of Fine Arts, Boston.

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

東松照明さんを偲んで

1月7日の午後、学芸課に通のFAXが沖縄から届きました。写真家・東松照明の逝去を知らせるご家族からの連絡でした。昨年12月14日に肺炎のために82歳の生涯を閉じられました。本紙でも度々紹介してまいりましたが、私ども名古屋市美術館では、2011年4月に開催した特別展『写真家・東松照明 全仕事』を開催し、「戦後写真の巨人」と呼ばれた東松氏の業績を紹介いたしました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

東松さんとはじめてお会いしたのは、美術館が開館してまもなく、1990年ごろだったと記憶しています。その頃お住まいだった千葉の上総一宮を訪ね、将来の展覧会開催を申し出ました。開館したばかりの美術館の新人学芸員であり、写真に対する知識や指針、さらには調査や交渉の経験は乏しい「ビギナー」であったものの、当時でさえ、東松照明の表現の多様性とその質の高さには圧倒され、展覧会としてどのように見せるかが決して容易ではないことはすぐにも察知できました。その後、ギャラリーでの内覧会でお目にかかったり、海外展のための交渉等で移住された長崎を訪問したのも、二度や三度ではなかったと思います。結局、展覧会実現にたどり着くまで、20年余りにも亘りお付き合いさせていただいたことになりましたが、出身地の美術館として目をかけていただいたのか、会うたびにさまざまなお話を聞かせていただきました。そうしたお話の中から写真家・東松照明の別の一面を示すエピソードをひとつ。

《全日本学生写真聯盟》の創設(1952年)や写真家自身によるフォト・エージェンシー《VIVO》(1959年)、さらには《WORKSHOP写真学校》(1974年)の設立等、東松さんのオルガナイザーとしての一面は、追悼や回想でよく紹介されるようですが、日本の近代写真史の再編を、最初に取り組まれたのが東松さんであることはあまり詳しく知られていません。1968年6月に東京で開催された「写真百年展」を「表現に重点を置いた目で見る写真展」として企画・提案し、編纂委員として全国調査を実行した中心的存在が東松さんでした。当時、美術館といえば、東京国立近代美術館や鎌倉の神奈川県立近代美術館など数えるほどしかなく、なおかつ写真に関しては、収集はおろか見向きもされていない状態でした。無償の「犠牲的精神」で全国各地を調査し、実見した写真は50万点を越え、会場では1,550点にも及ぶ写真表現が展示・紹介されました。友人でもあった評論家の多木浩二氏とともに名古屋、大阪、京都、芦屋に写真を求めて出向かれ調査されました。当地名古屋では戦前の「前衛写真」を推進していた坂田稔(1902-74)や山本悋右(1914-87)を訪ね、直接取材されたようです。日本の写真表現史を始めて詳細に検証したその企画力と行動力、表現を見極める批評眼は、今日に置き換えても、おそらく世界でも屈指のキュレーターであったことでしょう。「僕は七回生まれ変わっても写真をやるからね。」と言って居られた東松さんは、「見る」ことに徹底した人であり、その眼差しは表現を通して社会ばかりでなく歴史をも透徹していたと言えます。展覧会を離れて、そのあたりのことをより深くお聞きしたかったのですが、そうしたことも叶わなくなりました。残念で仕方がありません。(J.T.)

BOOK

『芸術実行犯』 Chim ↑ Pom

朝日出版社 2012年

2011年、渋谷の岡本太郎の壁画《明日の神話》に、福島第一原発の爆発の様子が描かれた絵が付け足される事件がおきた。実行したのはアーティストグループChim ↑ Pom。彼らは軽やかに社会のタブーに触れるテーマを扱う。2008年の《ヒロシマの空をピカッとさせる》は大きな論議を呼んだ。飛行機雲で空に擬態語の「ピカッ」という字を書くというゲリラ的に行われた行為が新聞に掲載され、そこから始まった騒動は広島市現代美術館での展覧会が中止になる迄に至った。騒動を引きおこした行為から生まれた作品は実際のところ、日本においてもはや戦争や原爆にリアリティが感じられない世代の感覚を体現し、現在の平和を象徴し、原爆について改めて考えさせるものに思える。関係機関への事前通知がなかったことが問題視されたようだが、原爆というあまりに大きく複雑なテーマが様々な波紋を引き起こした。後に問題となった作品を展示した展覧会を見に行くと、偶然にも「カリスマ被爆者」と呼ばれる方の講演会が開催され、原爆体験と命の尊さにまつわる感動的な話をお聞きした。Chim ↑ Pomは一連の

事件の後、被爆者の会の人々と対話を続けていて、講演会はその交流から展覧会への激励として行われたものであったのだ。

さて、前置きは長くなってしまったが、この本を読めばこれまでのChim ↑ Pomの活動の概観とスタンスがよく分かる。社会のタブーを侵すことで、社会の構造に潜む様々な問題が露になることを目の当たりにし、その都度、自由への責任と代償をしっかりと引き受けてきた。ルールを越えることで、結果としてルールそのものの枠が広がっていくという体験をしてきた彼らが「アートは自由であり、それはそもそも人間が自由だから」、そして「アートは新しい自由を作る」という言葉は重く、痛快だ。自身の活動を含めながら、世界で同時代的に展開している社会にアクションを起こすアーティストを紹介し、社会派アクティヴィズムアート(!?)の文脈についての優れた入門書にもなっている。目に見えない規則でがんじがらめの世の中で、彼らのように「自分に限界を決めない」で「自由」ということに誠実に生きる人たちがいることが私には奇跡的にも思われる。(hina)



【編集後記】

2013年初めてのアートペーパーをお届けします。とはいえ編集段階では2月下旬、まだ空調工事による休館の真っ只中です。実は今回、空調設備以外にもいくつかメンテナンスを加えています。一つは壁面の色。当館の常設展は収集方針にあわせて部屋を4色に塗り分けていましたが、度重なる展示作業や経年劣化で傷んでいることから、塗り直しに合わせて色味も変えることになりました。どんな仕上がりになっているかは見てのお楽しみです。もう一つは図書室、本棚を増設し、従来より多くの書籍をご覧いただけるようになりました。一方、設備の老朽化と修理困難との判断から、長年ご愛顧いただいた図書室内のビデオコーナーは撤去することとなりました。さまざまなご意見があると思いますが、ご理解いただければ幸いです。リニューアルした名古屋美術館を今後ともよろしくお願ひ申し上げます。(3)

アートペーパー第92号 発行日: 2013年4月1日

発行 名古屋美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日: 毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間: 午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は開館の30分前まで

Nagoya City Art Museum